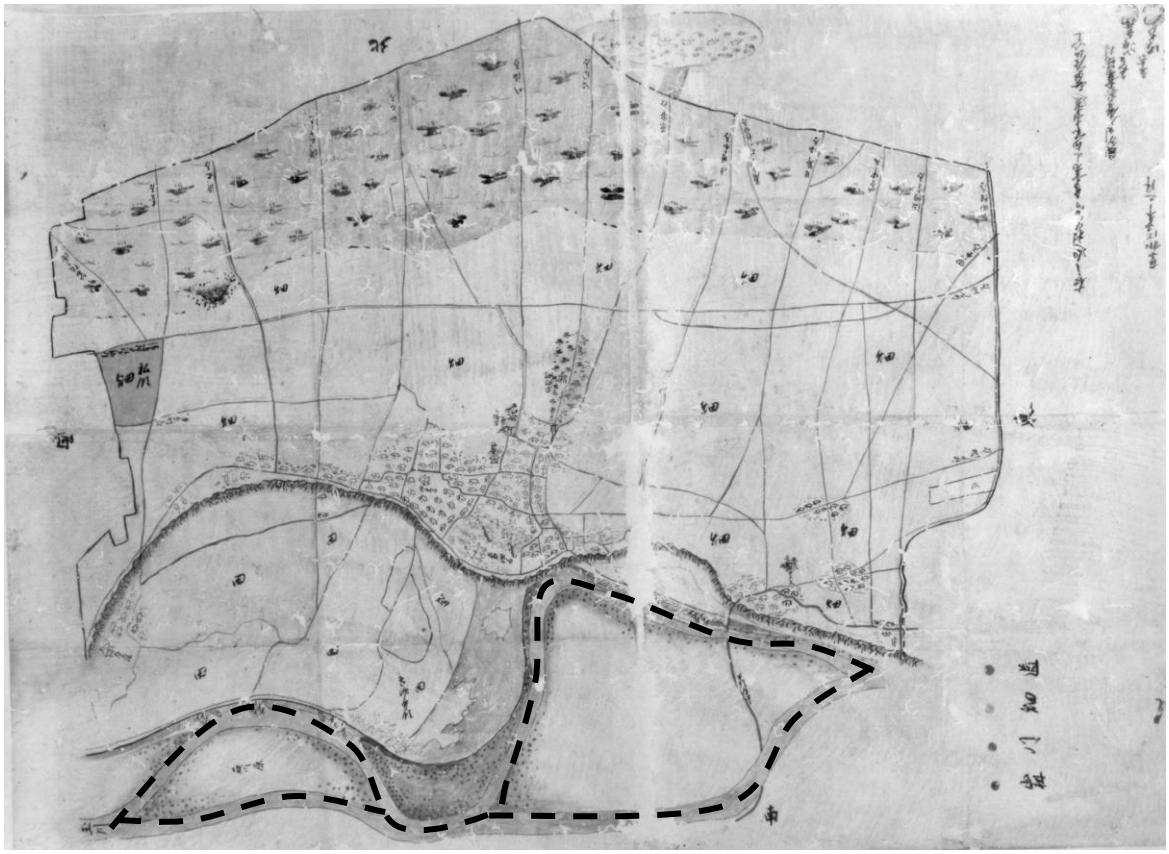
資料館見学の手引き

江戸時代の立川

立川市歴史民俗資料館
〒190-0013 立川市富士見町3-12-34
042-525-0860
2006年7月改訂



柴崎村絵図（享和四年・1804年）　多摩川（絵図下部の点線）は２筋に分かれ、現在にくらべ、北よりに流れていたことが分かります。

■江戸時代の立川

江戸時代、立川市域には柴崎村（市南部）と砂川村(市北部)の２つの村がありました。

柴崎村は、自然発生的にできた村で、古代から人々が暮らしていました。江戸時代に編纂された「新編武蔵風土記稿」には、19世紀はじめの柴崎村のようすが、広さ東西約 30丁（3272m）、南北約21丁（2290ｍ）、民家は248軒、水田は少なく畑が多い、と記録されています。柴崎村は、ほとんどが幕府の直轄地（天領）で、幕府の直接支配を受けていましたが、尾張藩の鷹場の一部でもあり、尾張藩の支配も受けていました。その他、多摩川の鮎を将軍家へ献上する鮎運上なども負担していました。

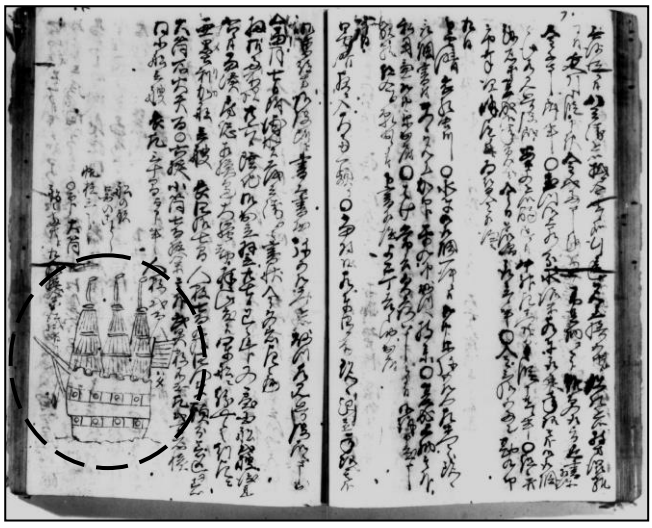
一方、砂川村は、江戸時代の新田開発によって開かれた村です。寛永四年（1627）ころから本格的に開発が始まり、承応三年(1654)に玉川上水が完成すると、３年後には砂川分水が引かれ､新田の開発はさらに進みました。

新田村は計画的につくられたものが多く、砂川村の場合も、屋敷地は五日市街道の両側に沿ってまっすぐに並んでいました｡「新編武蔵風土記稿」には、東西約１里（3927m）、南北約７丁（764m）、民家は271軒、山林や水田はない、と記録されています。砂川村も天領で、やはり尾張藩の鷹場支配も受けていました。

■公私日記

公私日記　天保九年の表紙

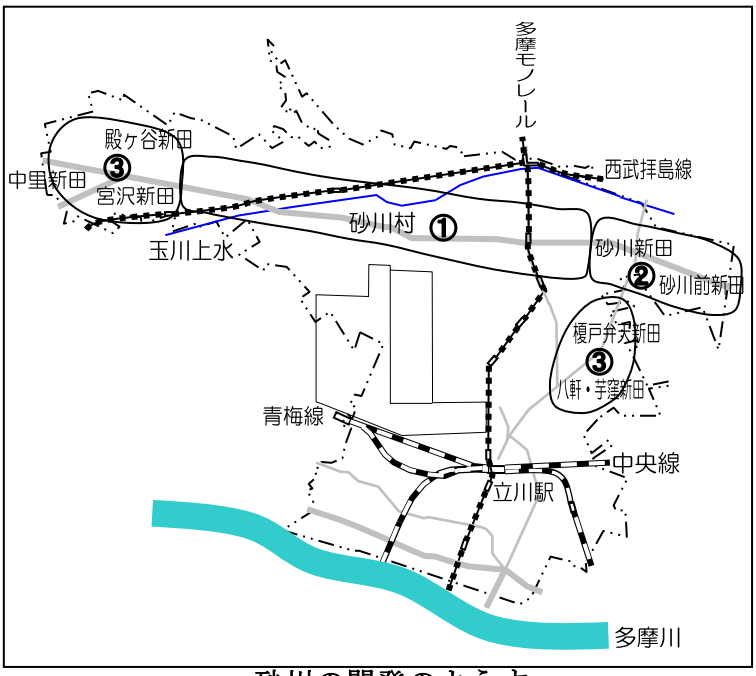
公私日記は、柴崎村の名主、鈴木平九郎によって書かれた日記です。天保八年（1837）から安政五年（1858）までの２０年間、日々の天候、名主としての公的な記録のほか、年中行事、農作業、物価の相場、村内の事件、社会情勢など、多岐にわたって克明に記録されています。



公私日記本文（弘化三年六月十日の記事）

黒船（点線囲み部分）が描かれています。この黒船は、弘化三年（1846）五月二七日に浦賀沖に現われたアメリカの軍艦で、大砲を備えています。

■砂川の新田開発



砂川の開発のようす

砂川の新田開発は、寛永四年ころから本格的に始まり、当時の残堀川流域（砂川町三・四丁目付近）に沿って進められました。明暦三年（1657）に玉川上水から砂川分水が引かれると、その水を利用して新田をひろげてゆきました。開発が進み、新田が大きくなると、元文元年（1736）に、幕府から正式に村と認められ、砂川村となりました。（上図①）

砂川が村となってからは、砂川村の東方に開かれた新田が（上図②）、砂川新田、砂川前新田と呼ばれるようになりました。

１８世紀中、砂川村周辺には他にも新田が開発されており（上図③）、西方には中里新田、宮沢新田、殿ケ谷新田が、東南方には八軒新田、芋窪新田、榎戸弁天新田が開かれました。

砂川村は、西半分を上郷、東半分を下郷と大別し、それぞれを一番組から四番組まで合計八組に分け、上郷一番などと呼称していました。その後、これらの組は一番から八番までに改められました。幕末の慶応三年（1867）に砂川新田と砂川前新田は砂川村に編入され、それぞれ九番、十番となりました。